

「「ごちゃまぜ」のまちづくり

～高齢者も障がいのある方も誰もが居場所と役割を持つコミュニティ～」議事録

(開催要領)

1. 開催日時：令和2年10月25日(日)13:00～15:30
2. 場 所：輪島KABULETうめのや(石川県輪島市)
3. 登壇者：内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局次長 武井佐代里
社会福祉法人佛子園理事長 雄谷良成
女優・歌手 中尾ミエ
輪島市副市長 坂口茂

(プログラム)

1. 開会挨拶・施策説明
「生涯活躍のまち」
内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局次長 武井佐代里
2. 講演
「ごちゃまぜ～看取り合う共生社会～」
社会福祉法人佛子園 理事長 雄谷良成
3. クロストーク
「顔が見えるまちで暮らしたい
～空き家の利活用で再生した「輪島KABULET」の魅力～」
雄谷良成/中尾ミエ/坂口茂
4. 閉会

* 敬称略・順不同

司会：

皆さんこんにちは。

内閣府主催のシンポジウムライブをご視聴いただきありがとうございます。

本日司会進行を務めます富優香子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて今回のシンポジウムライブは石川県輪島市の輪島カブーレ、築およそ80年の蔵を改装したコワーキングスペースからお伝えします。石川県の北部能登半島に位置する輪島市は、全国的にも有名な輪島塗、朝市、また白米千枚田など観光地としても知られ、なんととっても海の幸がおいしい魅力ある町です。そんな輪島市で全国から注目を集めている地方創生の取り組みが今回のシンポジウムのテーマです。テーマは「ごちゃまぜのまちづくり～高齢者も障がいのある方も誰もが居場所と役割を持つコミュニティ～」です。

第1部は「全世代・全員活躍型生涯活躍のまち」のフロントランナーとして活躍する社会福祉法人「佛子園」理事長の雄谷良成さんが「ごちゃまぜ～看取り合う共生社会～」と題し

て講演します。第2部は、パネラー3名によるクロストークです。輪島市の「ごちゃまぜのまち・輪島カブレ」の取り組みについてその理念に共感した女優で歌手の中尾ミエさんと、行政の立場から輪島市副市長の坂口茂さんを交えてお話をいただきます。なお新型コロナウイルス感染症防止の観点から一部出演者はリモートでの登壇となります。ご容赦くださいますようお願いいたします。まずは石川県についてVTRにまとめましたのでこちらをご覧ください。

<石川県紹介VTR 2分00秒>

1. 開会挨拶・施策説明

司会：

続いては内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局の武井佐代里次長より、開会の挨拶と誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくりの施策である「生涯活躍のまち」について説明します。

武井：

ただいま、御紹介いただきました、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局次長の武井と申します。皆様におかれましては、日頃より、地方創生施策の推進にご理解・ご協力いただき、心より感謝申し上げます。

本日は、「生涯活躍のまち」について、その施策の位置づけや施策の説明、先進事例等の紹介をさせていただきます。「生涯活躍のまち」は、年齢や障がいの有無等を問わず、多様な人々が居場所と役割をもって、生涯を通じてやりがいを持って、アクティブに活躍できるコミュニティづくりを目指すものです。新型コロナウイルスの状況を踏まえ、オンラインにて開催させていただきますが、最後までお付き合いいただきたいと思います。

今日は、大きく二つのことをお伝えしたいと思います。一つ目は、日本の人口や人の移動に関して、データで確認をしつつ、地方創生に関する目標や施策の基本的な方向性をまとめた、「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」についてご説明します。二つ目は、今日のシンポジウムのテーマ、「全世代型・全員活躍型生涯活躍のまち」について、その考え方や自治体の取り組みへの意向、地域における実践例についてご紹介します。

(※以下、プレゼン画面で説明)

<1ページ>

日本の人口等の状況ですが、棒グラフは人口、折れ線グラフは高齢化率を表しています。総人口は、右から4つ目と3つ目の間の2008年がピークで、2019年は9年連続の減少で、2019年は約1億2600万人となっています。

折れ線グラフにあるように、高齢化率は2019年に28.4%と、過去最高水準まで高まっています。

<2ページ>

出生に係る動向ですが、青い棒グラフが出生数、赤い折れ線グラフが合計特殊出生率です。出生数は、右端2019年には86.5万人と過去最少にまで減少しています。過去のベビーブー

ムと比較すると、約6～7割の減少です。

合計特殊出生率は、2015年に1.45まで回復しましたが、その後は低下し、2019年には1.36と減少しています。

<3ページ>

東京圏への人の流れについてみてみます。

東京圏への転入超過、つまり入ってくる人と出ていくとの差ですが、増加傾向にあり、2019年は全体として、14.6万人の転入超過です。

年齢別にみると、10代後半から20代、グラフの青色・緑色のところですが、転入超過の大半を占めています。

<4ページ>

先ほどの東京圏への14.6万人の転入超過を男女別にみると、右端、赤い囲みの部分ですが、2019年は男性が6.4万人、女性は8.2万人となります。

かつては、男性の方が東京圏への転入超過数が多い傾向にありましたが、最近の傾向としては、女性の転入超過数が男性を上回っている状況にあります。

今まで見てきたように、少子高齢化により人口減少が急速に進行している中、東京圏への一極集中の傾向が続いています。若い方を中心として地方から東京圏に人口が流出していることなどにより、地方における人口、特に15～64歳の生産年齢人口が減少しています。

<5ページ>

これらの人口減少、東京圏への一極集中を踏まえ、2019年、昨年12月に閣議決定した第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略は、地方創生の施策の基本的方向を示すものです。

例えば、人口減少を和らげるため、「結婚・出産・子育ての希望をかなえる」、「地方の魅力を育み、ひとが集う」といったことなどの実現を通じて、「将来にわたって活力ある地域社会の実現」と「東京圏への一極集中の是正」を目指し、地方創生に取り組むこととしています。

<6ページ>

第2期総合戦略における主な取組の方向性としては東京圏への一極集中の是正として、地域に住む人々だけではなく、地域外から地域の祭りに毎年参加し企画や準備に携わったり、副業・兼業で週末に地域の企業で働いたり、その地域や地域の人々にいろんな形で関わる人々、いわゆる「関係人口」を創出し、増やしていくことなどにより、地方移住の裾野を拡大していくこととしています。

さら、赤い点線囲みにありますが、新たに横断的な目標として、多様な人材が活躍できる環境づくりなどを積極的に推進することとしています。

本日、お話す「生涯活躍のまち」については、この「多様な人材が活躍できる環境づくり」において、「誰もが活躍する地域社会の推進」として、横断的な目標に位置づけています。

<7ページ>

第2期総合戦略は、下の図にあるように、4つの基本目標、2つの横断的な目標で構成されています。

「基本目標1 稼ぐ地域をつくとともに、安心して働けるようにすること」、「基本目標2

地方とのつながりを築き、地方への新しいひとの流れをつくること」、「基本目標3 結婚・出産・子育ての希望をかなえること」、及び「基本目標4 ひとが集う、安心して暮らすことができる魅力的な地域をつくること」。これに加えて、横断的な目標として、縦書きにあるように、「新たな全世代・全員活躍型生涯活躍のまち」を位置づけたところです。

何が新しいのかということについてお話ししたいと思います。

これまで、「生涯活躍のまち」について、各地域における様々な取組が国の検討会などで報告される中、多様な世代の人々がつながりを持ち、役割をもって、生き生きと暮らす地域コミュニティづくりを進め、まちの魅力が向上した結果として、中高年齢の方だけでなく、若者や子育て世代をはじめとした多世代の人々を地域に呼び込み、活性化されていることが分かってきました。

このため、自治体や専門家の方からの意見や実態なども踏まえ、第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略においては、「生涯活躍のまち」の位置づけを見直しました。これまで、「生涯活躍のまち」は、中高年齢の方の移住に重点が置かれていましたが、第2期総合戦略では、若者、高齢者、女性、障がい者、外国人など、誰もが居場所と役割を持ち活躍できる地域社会を目指すものとして、「ごちゃまぜ」のコミュニティづくりを推進する施策として「全世代・全員活躍型「生涯活躍のまち」」を位置づけました。

また、「生涯活躍のまち」は、いろんな分野にかかわる施策であるため、しごとづくり、ひとの流れづくり、少子化対策、まちづくりなどを実現するため、地域福祉、健康増進、人材養成、雇用などの関連施策等を一体的に活用して推進していくこととしています。

<8ページ>

「全世代型・全員活躍型「生涯活躍のまち」」について、具体的にみていきたいと思えます。新しい「生涯活躍のまち」は、全世代を対象として、移住者や関係人口、地元住民など誰もが居場所と役割を持つ、「ごちゃまぜ」のコミュニティづくりを推進することとしています。具体的なコミュニティづくりとして、エリア全体の魅力向上や空間デザインといった観点を視野に入れ、4つの機能を確保します。1つ目は、地域資源としての空き家などを活用し、多様な人々が集う、「ごちゃまぜ」の多世代交流の場づくりとしての「交流・居場所」、2つ目は雇用によるものだけではなく、育児や家事の合間に短時間の仕事を引き受けることや地域におけるボランティアなど、社会参加的なものも含む「活躍・しごと」、3つ目はハード面の整備だけを住まいとして考えるのではなく、高齢者の孤立などの地域課題の解決のための様々な取組と掛け合わせて、コミュニティとの関係性を重視した「住まい」、そして、4つ目は、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるよう、地域の自治会や介護施設、病院などと連携した地域包括ケアシステムや加齢により健康リスクが高まる中高年齢者だけではなく、全世代を対象とした運動や食事支援などの「健康」。

以上、4つの機能を確保することに加え、地域に住む人々だけではなく、地域に必ずしも居住していない地域外の人々に対しても、地域のコミュニティに関わる担い手としての活躍を促すことで、地域のコミュニティの活性化が期待できます。

そのため、関係人口を含む都市と地方の人材循環を通した「人の流れづくり」を推進することとしています。

<9 ページ>

こうした動きを受け、自治体に対する国による直近の調査では、「生涯活躍のまち」を推進する意向があると回答した自治体が調査開始以降、最高水準である 366 団体と大幅に増加したところです。

全世代を対象としたコミュニティづくりに重点を置いた、「生涯活躍のまち」について、多くの自治体から現状の方針や取組と合致している旨の回答があり、少しずつ、広がりを見せているところです。

<10 ページ>

高齢者も障がいのある方、子どもさんも誰もが居場所と役割をもつコミュニティの事例を 1 つ御紹介します。

佛子園の雄谷理事長が取り組まれているシェア金沢の事例も素晴らしい取組ですが、佛子園については、この後、雄谷理事長からお話があるとのことですので、私からは北海道当別町の事例を御紹介させていただきます。

当別町は札幌市から 20~30km ほどいったところにある人口 15,700 人ほどの町です。

そこでは、子供や高齢者、障がいのある方といった多様な人々が様々な形で交流することにより、地域コミュニティが活性化しており、主に 3 つの拠点における事例を紹介したいと思います。

一つ目は共生型地域オープンサロンです。喫茶店のキッチンやホールで障がいのある方に働いていらっしゃる場で、子どもの教育にも資する取組が行われています。また、御高齢の方がボランティアでサロンにある駄菓子屋で値札をつけながら、子どもや障がいのある方の見守りや交流することなどを通して、介護予防や、やりがいにも繋がっているといえます。また、学童保育も行っており、例えば子どもがカフェ店員の体験をすることなどを通して、子どもの学びに繋がる取組が展開されています。

二つ目は共生型地域福祉ターミナルです。地域住民の困りごとの解決や住民同士が交流する拠点となります。例えば、御高齢の方が特技を活かして、子どもに囲碁を教えることなどを通して生きがいの創出、御高齢の女性が子供の見守りを行うことによる育児の支え合い、免許を返納した御高齢の方を、他の住民が車で送迎することなど、地域住民による互助の取組が進んでいます。

三つ目は共生型コミュニティ農園です。障がいのある方の就労支援だけではなく、認知症を煩っている御高齢の方が御自身の経験を活かし、畑作業に従事することで活躍されていたり、団塊世代の方が畑やレストランでパーティを企画することで、世代を超えた交流を生み出している取組が進んでいます。

本日、御紹介させていただいた事例を含め、全国では様々な素晴らしい取組が進められています。

<11 ページ>

最後に、誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくりとしての「生涯活躍のまち」づくりのポイントについて触れたいと思います。

「生涯活躍のまち」の魅力は、人々が集まれる施設の整備だけではなく、地域のコミュニテ

ィに関わる者の多様性が重要であると考えます。

しかしながら、冒頭に触れたように、人口減少や少子高齢化などによって、地域のコミュニティが弱体化しているという声が多く聞かれます。

そこで、多様な人々が交流するコミュニティづくりとして、祭りや町内会活動といった人々のつながりを維持するための様々なしかけづくりが重要となってきます。

この後、実際にごちゃまぜのコミュニティづくりに取り組まれている雄谷様より、様々な事例やヒントが紹介されると思いますので、御期待いただければと思います。

結びとして、人生 100 年時代を迎えるにあたって、若いうちに教育を受け、その後、仕事に就き、一定の年齢になったら退職・引退するといった一つの方向の流れだけではなく、本人の希望に応じて、年齢に関わらず、教育を受け、仕事につける社会、本人の希望に応じて活躍することができる誰もが居場所と役割を持つコミュニティの実現に、国として今後とも取り組んでまいりたいと思います。

以上をもって、私の説明とさせていただきます。御清聴ありがとうございました。

2. 講演

司会：

それではここからは第一部です。講演者は社会福祉法人佛子園理事長の雄谷良成さんです。では雄谷さんのプロフィールを簡単にご紹介します。幼少期は祖父が開設した知的障がい児の入所施設で障がいのある子供達と暮らしていました。大学を卒業後は青年海外協力隊としてドミニカ共和国で活動した経験もあります。その後実家の佛子園へ。2013 年に開設したシェア金沢は「生涯活躍のまち」のモデルケースとして全国から注目を集めました。今回の講演のテーマは「ごちゃまぜ～看取り合う共生社会～」です。では雄谷さんお願いします。

雄谷：

皆さんこんにちは。

今ご紹介をいただきました社会福祉法人佛子園、公益社団法人青年海外協力協会の雄谷です。今日は世界がコロナの下で本当に色々な事が制限される、そんな時代の中で私たちはそれでもどのように生きていくのか、少し皆さんと一緒に考えていきたいと思います。それではまずVTRを見て頂いてから進めていきたいと思います。よろしくをお願いします。

<佛子園紹介VTR放映>

雄谷：

どうもありがとうございました。

ここからは資料を使いながら進めていきたいと思います。よろしくをお願いします。

先ほどからごちゃまぜという言葉がたくさん出てきています。いろんな人が関わりながらこのコロナの中で過ごしています。ごちゃまぜは私たちそれぞれの拠点です。消毒液の次亜塩素酸を前から作っていました。政府の緊急事態宣言が出た直後に、ごちゃまぜの拠点から地

域の皆さんに、マスクの配布を行いながら、同時に消毒液を配り始めました。自分たちの備蓄がなくなるという心配もあり、私たちスタッフの中には大丈夫なのかという話もありました。しかし、何よりも地域を支えていくことが大切だろうということで、そのような活動を行いました。結果として佛子園がこうやって頑張っている以上は僕らも施設の消毒をしたりとか、あるいは佛子園の備蓄が途切れないようにということで、周辺の企業の人達が反対にマスクを持って来ていただいたりしました。そういった点からも地域全体でいろんなことに向かっていくことが大切だと分かってきました。

この写真はコロナ対策の助成金で日本海倶楽部という私たちの拠点に入った車両です。もちろんコロナになる前から買い物難民であったり通院難民であったりという問題がありました。そこに対して更にコロナでそういった問題が倍増していく中で、私たちはいろんな物資を届けながら、且つ、様々なよろず相談を始めています。私たちがいろんな人たちと関わる中でやっている三つの事があります。

コロナ禍ということもありますが、そういう時だからこそ、いつもよりバランスよく食べ、しっかり運動し、しっかり寝るということを心掛けています。1日30分ぐらい運動すると、17%ぐらいうつ病の発生を防ぐことができるというデータも昨年発表されています。

それらに加え日光浴も心掛けています。やはりビタミン等は食べるだけではなく、日光浴をすることで免疫性を上げていくことができます。「食う寝る遊ぶ」ということなのですが、コロナでいろんな事を制限されるからこそ、いつもよりしっかり野菜を食べたり、いつもより運動することが大切です。寝る直前までスマホを見ている人は、30分前になったらスマホを見ずに寝ることを心がけていくと、コロナ対策を取りながら今までよりも僕らは元気になるという考え方ができます。少し変な言い方をすればコロナという問題があるからこそ今までよりも元気になろう、そういう考え方ができるのではないかと思います。先ほどの動画の中にもあるように、私達は様々なごちゃまぜの拠点を始めました。その中の一つが輪島カブーレというプロジェクトです。

後ほど坂口副市長にもお話をして頂きますが、まち・ひと・しごと創生本部が「生涯活躍のまち」というものを推進しだしてかれこれ6年になります。この輪島カブーレというのはその最初の7つのモデルのひとつです。今では全国で366か所と非常に増えています。地方行政が、子どもも若者もお年寄りも、障がいのある人もない人も、認知症の人もそうでない人も、それから日本人もそうでない人も、みんなが一緒になって暮らすということを考えていこうというキャンペーンが始まりました。私たちのケースは、その中でも社会福祉法人佛子園と、それから公益社団法人青年海外協力協会がジョイントベンチャーを組みながら、全国で青年海外協力隊経験者が年間1000人ぐらい帰ってきますので、開発途上国でその支援に入った人間が今度は日本の地方創生に活躍できないかということで、そういった若者を今度は各地に送りながら色々なモデルケースを進めてきました。

この写真は輪島市の様子です。ピーク時には4万8000人もいた人口が今では2万7000人程度ということになりました。単なる人口急減、少子高齢ではありません。輪島塗の売り上げが、ピーク時140億円ほどあったものが、今36億円台になり、輪島市は100億円もの基幹産業を失いました。そして輪島市からは労働人口の流出が加速する現象が起きました。

そういった中で次々と空き家が増えていきました。それを少しずつ丁寧に改修していきます。例えばこの物件は高齢者や近所の人や障がいのある人、子供たちみんなが集まってくれるような温泉に改修をしました。また、その真向かいにある建物は、街の真ん中ではありながら空き家になっていました。夜歩くと明かりがない空き家は非常に怖いものがあります。そういったところに一つずつ明かりをつけていくというような作業になっていきます。また、この空き家はウエルネスに変えることが出来ました。会員制のウエルネスではありますが、子供たち、あるいは障がいのある人、認知症の人、いろんな人たちが使えるように工夫されています。

これもすぐ斜め向かいの建物ですが、昔医院だったところですよ。診療所だったところが廃業されてから十数年経ってしまいました。そういった空き家がたくさんあります。それが今、子育て中のお母さんがお子さんと一緒にクッキングを楽しめる、ママカフェに変身しています。これはこの拠点からは外れていますが、歩いて7、8分ぐらいのところの古民家です。輪島の人達にとっては非常に思い出深い、70、80年ぐらい前の古い建物です。この古民家は、子供の入学や卒園などの際に、必ずここでお食事をしながら皆でその思い出作りができる場所でした。それが、ご主人が亡くなり廃業し空き家になっていました。それを改装してラーメン屋になりました。東京でラーメン屋をやっていた店長が、こういったごちゃまぜの場所には是非自分も何か尽力できないかっていうことで移住をしてきてくれました。このラーメン屋でも障がいのある人たちが働いています。

一方で、大きな建物でしたので、今私が喋っている蔵の中はコワーキングスペースとして改装し、このようにカラフルな装いになりました。ここは若い人を中心に新しい働き方として利用されています。これはうめのやから歩いて1分ぐらいの元スナックになります。廃業してから十数年経ってこういった形になっていました。街の真ん中に明かりがないということは、非常に殺伐とした感じになっていきます。それをガレージハウスに変えていきました。輪島市は二輪ライダーを応援しようという事でオートバイやそれから自転車のサイクリストを一生懸命応援している街でもあります。そのような人たちが自分のオートバイや自転車、大切にしているものが雨ざらしにならないよう、預けられる場所として生まれ変わりました。空き家もそこに火が灯り、活気が生まれてきます。

輪島には日本三大朝市の一つがあります。しかし一方で能登半島地震があり、人口急減、少子高齢化がどんどん進んできました。そのような中で空き家、あるいは空き地を、いかに再利用しながら町の活性化をしていくかということが今問題になっています。

輪島市では次にこのようなカートを使い、街と街を、例えばスーパーや医院やあるいはコワーキングスペースや拠点等をつなぎ、観光客も地域住民の方も一緒に乗り合わせながら交流できるようにしていきます。2018年辺りから輪島市の商工会議所の皆さんが中心になって進めてきました。

輪島市は歴史のある町ですし、見るところも多くあります。千枚田、キリコ会館等、素敵な場所がたくさんあります。日本海の海の幸やお酒も美味しいです。しかし、美味しいものや素敵な場所を見ることも大切ですが、このごちゃまぜの場所にやってくる人たちは普段着の輪島の人たちの様子を見ています。例えば夏であればステテコ1枚、ほとんど普段着で温泉

に入りに来たお父さん、そんな人達と観光客がいろいろな会話をしながら輪島の色々な事に触れる、そのような機会がどんどん増えてきました。

今コロナ禍でインバウンドの人達は減っていますが、コロナ前までは非常に多くのインバウンドの人達が輪島市を訪れるようになりました。

この拠点には青年海外協力隊の経験者がいて、言葉の問題が比較的起こりにくいというのがありますが、輪島のいろいろな人たちに触れて、そこで会話をするのが非常に楽しく、本当の日本を見たようだと言われた方は言います。それが口コミでどんどん広がっていき、いろいろな人たちが訪れるようになってきました。

これまでリゾートというのは、大きな場所で大きなお金をかけて開発した、そういった非日常の場所をリゾートと呼んできました。そうではなく、輪島の皆さんが暮らしているところを肌で感じながら過ごすことに魅力を感じる方が増えてきています。それを私達はこの町をキャンパスにして、いろいろなものを描いていくことができるのではないかと考えています。この写真の人達はすべて輪島の人ですが、左上のこの人は、サービス付き高齢者住宅に住んでいる方です。その上の左から2番目、3番目、4番目の人は近くの輪島工房長屋の伝統工芸の輪島塗を皆さんに伝えるために活動している方です。その隣はこのお隣の重蔵神社の巫女さんです。私達のラーメン屋、中華そばいぶきの店長の隣にいる人は谷川醸造、お醤油をこのラーメンのために提供してくれています。この一番上の右側は、ちはらという焼肉屋さんです。ご年配の方ですが、非常に温かい迎え方をしてくださり、遅い時間でも嫌な顔ひとつせず受け入れてくれます。そのようなことが私達にとっては非常に居心地が良く感じます。そのような居心地の良さを皆で分け合う時代になってきたと思っています。

これは私たちの白山市の本部の様子ですが、この赤い点が私たちの本部です。この周辺のいろいろな人たちが相談に来たり、あるいは高齢者デイサービスに来たり、あるいは発達障害の人がいたり、障がいの重い人がいたりします。それからウエルネスにやってくる人、クリニックに来る人、ご自身で食事が作れず配食サービスを利用する人、温泉を利用する人など、そんな人たちがどんどん集まってきている場所です。

そんな人が一日にたくさん集まってきます。それもイベントとかではありません。日常の中でたくさんの方が集まってくるようになりました。この棒グラフは一昨年例ですが、このオレンジ色のところは普通の福祉施設や医療施設のサービスを受ける人とそれを受け入れるスタッフの合計の数です。その上の棒グラフの上の部分は、ふらっと遊びに来たりとかビールを飲みに来たりとか温泉に入り来たりとか子供同士で遊びに来たりとか、そういった人たちの合計の数です。こういった人たちがごちゃ混ぜになっていくといろいろなことが化学反応として起こってきます。このごちゃ混ぜっていうのはいろいろな人が関わることによってどんどんどんどんその機会が増えてきます。そしてそこからはいろいろな人の居場所ができてきます。よくある居場所というと、まずはやはり家です。次に、仕事場、職場あるいは学校です。

ところが、ワークライフバランスというのは、案外日本ぐらいなのです。仕事もしくは家ということなのですが、海外でよく聞かれるのはそれだけではありません。第三の場所があるという話を聞きます。

居心地のいい場所。職場でもない第三の場所ってどういう場所なのでしょう。定期的に行く場所でもなく、居酒屋とか図書館だったりもします。お店の常連であったり、福祉施設や医療施設のように何曜日の何時に来てくださってということではなく、予定外で、でも型にはまっておらず、居心地が良い場所。そのような場所が皆さんの周りにありますでしょうか。これは私たちの本部の職員室スタッフルームです。スタッフルームであるにも関わらず、ここにいる人は地域の人でお弁当を食べたりしています。左の真ん中ぐらいにスキンヘッドの人がいますが、この人はダウン症候群で心臓に疾患を持っていて20歳ぐらいまでしか生きられないと言われた方です。でも今32歳になっています。

奥には私たちのスタッフが働いています。手前の子は自閉症の子です。いろんな人がごちゃ混ぜになって過ごしています。そのようなことがどんどん広がっていくとどうなるか、これは私たちの本部のお蕎麦を食べたり、温泉に入ったりする場所ですが、カウンターではこのような風景がよく見られます。

この右側の方はごちゃ混ぜの場所ができるまではいろんなトラブルがありました。土曜日、日曜日、福祉サービスが無いような時には、ドラッグストアとかに行くとなんか物を取ってしまう方でした。別に欲しいわけじゃないのですが、心に隙間ができた時に取ってしまいます。私達はその都度警察に行って理由を話しながら、なんとか許してもらっていたのですが、いよいよ回数重ねると執行猶予がついてしまいました。しかし、今度一度でもやると実刑判決で刑務所に行かなくてはいけなくなりました。ちょうどその時にこのごちゃ混ぜの場所ができました。ごちゃ混ぜの場所ができてから彼は一度も物を取っていません。私達、佛子園のサポートの仕方はそこまで変わっていません。変わったことはというと、別に手を差し伸べられる等そのようなことではなく、地域の人と一緒にいられるようになったということです。そんな彼がいつのまにかお寺の前を掃除したりしています。

この真ん中にいるのは私の父親です。去年の9月6日にすい臓がんで亡くなりました。一昨年の10月にがんの宣告を受けて、ステージ4という段階でした。私達は最後までいろんな人達と関わりながら過ごしていこうという判断をしました。抗がん剤も使わず、地域の人たちと共に暮らしていくと判断しました。父親の右側にいる人は先ほどお伝えした20歳まで生きられるかどうかと医師に言われたダウン症候群の人です。地域の中でこのようにいろんな人が集まり、好き勝手に音楽を発表していると、皆さんと一緒に見てくれます。その中に入っても、やはりがんは進んでいきます。小さい子供達が保育園に来ています、そういった様子を見ながら、父は過ごしておりました。父は9月に亡くなったのですが、2月の節分の時の写真です。ついつい鬼をしてしまった父の様子です。子供達が本気で泣いています。

左上にいる人は自閉症の方です。そういった人達のごちゃ混ぜに暮らしています。それでもがんは進んでいきますから痛みは当然あり、黄昏れているシーンも何度か見られました。それでも地域の人たちに釣りに連れてってもらいながら、どんどん時間が過ぎていきます。真ん中のほうきを持って掃いているのはうちの父親です。お寺の境内の上から見たシーンです。これを書いたのは誰かと言うと不安障がいを抱えた女性です。不安障がいの方は色々な事が心配になります。普通だったら鍵をかけたか等、そのような事が募り募って一般の日常

の生活をするにもなかなかうまくいかなくなってくる障がいのことを不安障がいと言います。

でも彼女が書く絵というのは、チキンライスで作れるかしらって思った時に、小さい小人が来て助けてくれないかなあ等、そのようなことを絵にしていきます。不安に思うということ、障がいと捉えるとそうなのですが、うまく捉えるといろんなことに気を使うことができる人、という言い方ができます。

先程の挿絵は11月のカレンダーの挿絵、これは12月の挿絵です。うちの父親が亡くなった3ヶ月後です。お寺の鐘の右側にいます。父親がいろんな人と話していいいます。うちの父親と彼女の間にはそんなにコミュニケーションがあったように思えませんが、いつのまにか彼女は、いろんな人と話をしている父を見ていいいます。

いよいよがんが進んで、亡くなる2週間ぐらい前のことです。この左側にいる人は就労継続A障害の方で配食サービス、独居の高齢者の方にお弁当を届けている方です。父の鼻にはもう酸素が入っており、モルヒネ系の痛み止めを打たないといけない状況でした。そうすると、薬の副作用で意識が朦朧としてきます。そんな時に彼が来て、「寝てる場合じゃないだろう、酒でも飲め」と父に言いました。父の飲み友達です。社会福祉法人の会長を引退して長いのですが、そんな人と利用者の方が一緒になって飲んでいたので、「寝てる場合じゃないだろ」って言われるのです。そしてしばらくすると今度はこの左の執行猶予を受けた彼が見舞いに来ました。そうすると、父はにわかに元気になり、「お前たちみんなで来るってことは、俺もそろそろ死ぬってことか」と言いました。この右側の二人は何て答えていいかわからず、恐縮しています。モルヒネで朦朧とした意識がここで戻り、元気になります。このようなことがあり、すぐ彼らが帰った後、病院で私は父に言われました。「水割りが飲みたい。」父は水割りを3杯飲みました。何かあってもおかしくない状況ですのでドアは開けっぱなしです。ドクターや看護師さんも苦笑いです。80歳で亡くなったのですが、10代から飲んでいまして60年以上も飲んでできました。父はうまそうに水割りを3杯飲みました。

人との関係性の中でこういったことが起こります。亡くなった後、この写真の右側の方、山本さんは、父が好きだったお酒と饅頭を用意してくれて献杯してくれました。

山本さんも今年の1月に亡くなりました。そうすると第3の男が出てきます。芝さんと言います。芝さんは障がいのある人ではなく、うちのヘルパーさんです。うちに来て8年です。退職金を飲み屋に貢いでしまい、奥さんが呆れ果てて離婚されてしまいました。それでやけくそになっていたところ、たまたま私たちのところにやってきてヘルパーをしてくれていました。すると、いつのまにかここで私の父と山本さんとお酒を飲むようになりました。すると芝さんの生活も落ち着いていきました。でも2人が亡くなってしまいました。

すると芝さんは一つグラスを増やして、また献杯しました。芝さんが今度は私にお酒を勧めます。その背中を地域の人が見ているのです。この人は脳梗塞になり喋れない方で、スマホの画面で私に質問してきました。「私たまに会長の夢を見ます。」私はそれを聞いてドキドキしました。父は見てくれているのだと思います。

特に今コロナ禍になり、ごちゃまぜって何なのかを考えます。看取るというのは、残された

人が看取り、亡くなる方が看取られます。しかし、最近、看取り合うということなのではないかと考えるようになりました。いろいろな人たちの関係性を見ていると、誰が先に死ぬかということは誰にも分かりません。

しかし、関わりながら一緒にお酒を飲むときもあるでしょうし、悩みを相談する時もあるでしょうし、関係性が悪くなってしばらく会わないこともあるでしょう。そのようなことを地域の中で、それでも関わりながら生きていく、そういったことをまたいろんな人が背中を見ている。看取るとか看取られるとかというよりかは、人は看取り合っていくのではないかと感じます。

これは先程お伝えした執行猶予になった彼のデータです。この拠点ができる前までは、グループホームで自分の部屋に一人で過ごしていました。その後この拠点ができてからは拠点で過ごすようになりました。別にサポートを受けるとかそのようなことではありません。人の気配を感じながらいるのであれば、カウンターでコーヒーを飲んでいるだけの時間が普通あります。それでお互いの気配を感じながらいるだけで何かを満たされていきます。わかったことは、私達、社会福祉法人、あるいは医療法人の人間が、自分たちで何とかしてやろうってというような感覚に捉われていたのかもしれませんが。私達にできることはたくさん無いのかもしれませんが。できないことはたくさんあっても、地域の皆さんと分け合いながら、環境を作りながら、ある時は喧嘩をし、ある時は笑い合いながら、地域ができていきます。私達にできることは、そのような事なのではないかと最近思っています。

この写真の左下の彼、先ほど言った執行猶予を受けた人です。左上の彼は管理栄養士です。その右側の赤い帽子の彼女は介護福祉士、その下はグループホームのお世話をしている女性です。彼は支えられる人、残りの3人は彼を支える人という関係性ではないのです。従来の福祉や医療は、障がいやあるいは認知症といった状況になった時に支える人、支えられる人という関係性でしたが、いろんな障がいがあっても、私の父が彼らといることによって最後の最後を本当に心やすらかに送ってもらったように、それぞれが関わり合いながら助け助けられているということなのです。これはもう福祉や医療ではありません。

彼は皆と一緒に「どんな自転車がかっこいい」と言いながら自転車と一緒に出かけます。これは福祉サポートではありません。仲間です。「この自転車がかっこいいね」と言いながら、皆で「じゃあ今度のお休み、みんなで走りに行く？」と言って、こういったことが自然に起こります。そこで重ねていく経験がいつの日か、看取り合う形になっていきます。それがごちゃまぜという事だと思えます。またその背中を地域で暮らす子供たちが見ています。このように地域の人たちを皆で支えていくうちに、ごちゃまぜの場所が出来てきます。理想郷みたいだと言われますが、決してそうではありません。

実を言うと問題は起こり続けるわけですが、このコロナのように。でもいろんな問題を抱えながら、ひとつ解決したらまた一つ問題が起こり、一つ解決したらひょっとしたら三つ問題が起こるかもしれません。しかし、ある時は二つ解決できるかもしれません。そのような事をずっと重ねながら、皆でああでもないこうでもないと言いながら、それを皆で考えていきます。そういったことが、地域の中で大切なのではないのでしょうか。

日本の少子高齢、人口急減というのは確かに大きな問題ではあります。例えば台湾やシンガ

ポール韓国等々の国も近い将来そうなると言われていきます。

私たちが今迎えている状況というものが、一つの経験値となり、今度は国際社会に伝えていくということもできるのではないのでしょうか。そういった意味では、それはジャパンウェイなのかもしれません。

ちょうど時間となりましたので終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

司会：

雄谷理事長ありがとうございます。私も先日先ほど VTR にありました B's 行善寺に伺いました。そこではできないではなく、それぞれが出来ることを見つけ支え合いながら働く“ごちゃまぜ”の中で誰もが居心地よく過ごせるように信頼しあえる関係作りがしっかりとできていることが素晴らしいと思いました。この時間は「ごちゃまぜ～看取り合う共生社会」と題し、社会福祉法人佛子園の雄谷良成理事長にご講演いただきました。どうもありがとうございました。

さて続いて第二部では高齢者や障がいのある人などが生涯を通じて活躍できるコミュニティを実施している輪島カブーレをご紹介します。その前に輪島カブーレがあるここ輪島市についてみなさんにご紹介します。まずご紹介するのは伝統工芸の輪島塗です。日本を代表する漆の産地です。輪島塗は出来上がるまでの工程が 124 もあり職人による手作業で作られています。一度購入すれば使っているうちに欠けたとしても修理をしてもらえるまさに一生モノの漆器です。輪島カブーレプロジェクトは漆があふれる街づくりをコンセプトにしています。

続いてはこちら白米千枚田です。日本の棚田百選に認定され国の名勝にも指定されています。石川県を代表する観光スポットでもあり、また今も米づくりが行われています。そしてこの見事なイルミネーションの写真があぜのきらめきです。ちょうど先週、今月 17 日からあぜのきらめきがスタートしました。ペットボトルと呼ばれるおよそ 25000 個の LED 装置を置き 15 分ごとに色が変化するイルミネーションで千枚田を彩っています。毎年多くの観光客が訪れる人気のスポットとなっています。こちら来年 3 月まで行われるということです。

3. クロストーク

司会：

それではここからは第二部クロストークをお届けしていきます。テーマは「顔の見える街で暮らしたい～空き家の利活用で再生した輪島カブーレの魅力～」です。ではパネラーの皆さんをご紹介します。まずは先ほどご講演をいただきました、社会福祉法人佛子園理事長の雄谷良成さんです。よろしくお願いします。

雄谷：

よろしくお願いします。

司会：

続いては東京からリモートでのご出演となります女優で歌手の中尾ミエさんです。よろしくお願いいたします。

中尾：

よろしくお願いいたします。

司会：

中尾さんは全国の福祉施設に足を運びボランティア活動も積極的に行っています。ではなぜ今日の出演者が中尾さんかと申しますと、実は中尾さん、輪島カブーレと深い関わりがあるそうですね。

中尾：

深いかどうかはわかりませんが、関わりはあります。後ほどお話しさせていただきたいと思っています。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

司会：

そして行政からは輪島市副市長の坂口茂さんにもご参加いただきます。坂口副市長よろしくお願いいたします。

坂口：

よろしくお願いいたします。

司会：

坂口副市長はこの輪島カブーレの誘致活動の先頭に立たれたと伺っています。ではここからの進行は雄谷理事長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

雄谷：

皆さんお久しぶりです。

中尾：

もうしばらく行っていません。

雄谷：

どれくらいぶりですか？

中尾：

行かない間にラーメン屋さんなどずいぶん増えました。

雄谷：

ミエさん、ラーメン食べないですよ。

中尾：

食べますよ。早く行きたくてしょうがないです。

雄谷：

ミエさんはこのコロナの最中に、食べる、寝る、遊ぶことをしていますと言われたのですが、何か特別なことをしているのですか。

中尾：

特別なことはしていませんが、おかげさまで仕事が忙しかったです。それは私が綺麗になったからですか？

雄谷：

輪島塗を背景にすると、「中尾ミエさんいい人だったよね」と言いたくなります。

中尾：

リモートはみんなこうです。仕事もほとんどリモートです。人に触れ合えないというのは寂しいです。熱が伝わりません。

雄谷：

WEBなどの仕事ですか？

中尾：

テレビ出演です。舞台も始まりました。

雄谷：

舞台はどうでしたか？

中尾：

ソーシャルディスタンスで、共演者同士がくっついてはいけないのです。私も長い間この世界いますが、初めての経験でした。共演者と食事に行かない、楽屋にも出入りしないなどと言われました。2ヶ月ぐらい一緒に仕事をしましたが、全然コミュニケーション取れませんでした。すごくストレスが溜まり、満足感がなかったです。舞台が終わると、打ち上げもありません。

雄谷：
坂口さんとミエさんが知り合ったのは何年前でしたか？

中尾：
私は突然押しかけました。

雄谷：
びっくりしました。

中尾：
そうですね。電話しました。

雄谷：
最初、うちの従業員が電話を受けました。あの中尾ミエさんからの突然の電話でした。

中尾：
「お会いしたいです」と言うと、時間がなく忙しいと言われました。私は、無理やり、シェア金沢の方におしかけました。

雄谷：
びっくりしました。

中尾：
当時やっていたザ・デイサービスショーというミュージカルをぜひ見て欲しいと言いましたが、時間がないと断られました。何とかして時間を作って下さいと伝え、無理矢理見に来てもらいました。

雄谷：
そろそろ本題に入るようテロップが出ましたが、もう少しこのまま話をさせてください。ザ・デイサービスショーは、ミエさんが主演兼プロデューサーで矢沢マリ子さん役を演じていました。

中尾：
よく覚えていますね。

雄谷：
矢沢永吉のファンですので覚えました。
デイサービスを元気にするのです。ロックンロール。

中尾：

そうです。その前にヘルパーズというミュージカルも作りました。ヘルパーになって皆さんの手助けをするストーリーでした。デイサービスでも、今のデイサービスはみんな行きたがりません。送り出す方も何か後ろめたい雰囲気です。そうではなく、本当にみんなが行って楽しいデイサービスが作りたいと思い、高齢者の人達みんなでロックバンド作りました。私は自分がそういう場所が欲しいと思っていました。日本国中いろんなところに行きましたが、自分が行くとしたらどこに行きたいか考えていました。そのような時に雄谷さんにお会いしました。金沢に行き、輪島行き、「ここだ」と思いました。私が思い描いていた場所でした。雄谷さんにも一目惚れでしたが、場所にも一目惚れしました。

雄谷：

ザ・デイサービスショーを金沢でやられた時に見に行きました。そのとき、無理矢理舞台に上げられて踊れと言われました。素人が壇上に上がって踊るのは相当なことです。

中尾：

私達は舞台の上でやっていますが、皆さんにも楽しんでもらいたいと思っていました。こちらから提供するだけでなく、そこにいる人が皆で参加できて、良い思い出を作ることのできるミュージカルがやりたいと思っていました。最後は皆さんに踊ってもらいました。

雄谷：

“ごちゃまぜ”でした。

中尾：

みんな踊ってくれていましたよね。

雄谷：

どんどんみんな舞台に上がり、最後は子供から年配の方からいろんな人が舞台に上がっていました。あれはツイストでした。

中尾：

ツイストです。昔ツイストの女王と呼ばれていました。

雄谷：

ツイストを全世代で踊ることにびっくりしました。隣の年配の方がすごい勢いでツイストを踊っているのを見ましたが、80歳前後の方でした。

中尾：

逆にそういう形の方が青春時代にツイストを現役で踊っていました。懐かしいのです。コン

サートですと、何十分も平気で踊っています。心配になって楽屋の方に救急車用意しておいでくださいと言います。みんなでこの場を盛り上げましょうという、まさに“ごちゃまぜ”です。

雄谷：

それがご縁でした。最初にうちの本部とシェア金沢にも来て頂きました。次に輪島に行きました。最初にミエさんが輪島に来た時は、私はご一緒できませんでした。

中尾：

そうですね、お忙しい方です。

雄谷：

みんなの前やめてください。

中尾：

事実です。

雄谷：

坂口さんとはその後、何回かミエさんとご一緒させていただきました。その時はどうでしたか？

坂口：

ちょうど6年前に地方創生ということが言われ始めました。5年前に地方自治体すべての中で地方創生の総合戦略を作り出しました。その目標に向けて努力をしていくという計画です。そのコンサルに入っていた方が少し変わった方でした。雄谷さん達の行動も活動も見ていた方でしたが、目標、計画を実現していくことも大切ですが、具体的に日本版のCCRCをやっている方が金沢にいて、輪島で何か結果を出すために、じかにお会いしてお願いして輪島でもやってもらうという方法がありました。それに乗りますかという話がありました。是非一度行かせてもらうということからはじまりました。お忙しい方なので最初はお断りされたと思います。応援はしていただきますが輪島まで手を広げられないと言われました。アドバイスはしますと言われました。

雄谷：

当時、断っていたのですが、坂口さんは「そういうことでお願いします」と言いました。日本語が通じていませんでした。

中尾：

雄谷さんはいつも最初は断ります。そこで私達はめげてはいけません。

坂口：

おかげさまで輪島に来ていただきました。一旦来るとなれば、その後のスピード感がすごく早いです。センスがあってエンターテインメント性があり、そしてスピード感もあります。すると、あっという間に輪島の街中に、なかなか難しかったと思いますが、空き地・空き家を活用して、そして輪島の町家の様式を上手に使いながら、この輪島カブーレを展開していただきました。私の判断は間違っていないでした。

雄谷：

判断は人にNOと言わせないよう迅速に進めていきます。坂口さんが、市役所の様々な部の人を集めて、「何もしなかったら輪島はなくなるんだ」と言いました。いよいよ逃げられなくなったと思いました。

雄谷：

ザ・デイサービスショーの話に戻りますが、マリ子さんが対応する人の中に見当識障害の方が出てきます。見当識障害というのは、自分がどこにいるのか、今何時か、相手が誰だったか、社会生活で過ごしていく上で問題が出てくる事が見当識障害です。そのような役の方が出てきました。その人たちがバンドをやらしたらすごいのです。

中尾：

ミュージカルでは実際に高齢者です。平均年齢70歳ぐらいでした。実際に物忘れが多い年齢の方がたくさんいます。みんなともかく稽古に出てくるのが楽しいと言います。本番が始まり日本全国をまわりましたが、かなり過酷なスケジュールでした。それも楽しいと言ってくれます。これがまさにお仕事だと思ってやりましたが、これがデイサービスだと思いました。要するに好きなことを最後までやれることが一番幸せです。本来あのお芝居もずっと続けていて、誰かが舞台上で最後迎えてくれてもいいと思っていました。

雄谷：

舞台ではなく、楽屋でばったりいってもいいという話もしていました。

中尾：

楽屋ではなく、舞台でもいいです。最後の最後まで仕事ができることが一番人間幸せだと思います。だから私はあの人達に比べると若かったからですが、これから先のことを考えると自分が最後どこにいたら幸せなのか考えました。

雄谷：

今、ミエさんがうちの拠点をいくつか見た上で、輪島が良いと感じたのはどの段階ですか？

中尾：

一目惚れです。今日のサブタイトルでもあるように、街を歩いていると、建物の中の明かりが見えます。車があまり通ってなくて徒歩圏内でいろんなものが集約されています。温泉にみんな集まってきて、そこがみんなのコミュニケーションの場所となります。ジムもあります。私が思い描いていたものが全部そこにありました。広すぎず本当にいい塩梅のスペースでみんなが目が行き届くことが、何よりいいと思いました。スタッフの人が仕事場に来ることが楽しいとおっしゃいます。これは最高だと思いました。

雄谷：

坂口さん、輪島市民からみて輪島はどういうところですか？

坂口：

田舎の方はどこも一見さんにはなかなか馴染まずに、心は開かないと思います。輪島の人達は輪島塗の仕事もあり、よく外へ出て行きます。また小さい市ですが、大勢の観光客に来ていただいています。市外の人たちに接することにも慣れていているという風に思います。一度仲良くなると、とにかく野菜でも魚でも、何でも家の方に届けたり、古き良き生活習慣が結構残っています。リヤカーで魚を売りに行きます。朝市もありますが、漁師町のお母さんが、自分のエリアを持っています。そこにリヤカーを引き、その日に取れた魚を売って歩きます。以前は街中に魚屋さんはありませんでした。リヤカーで魚を一軒一軒にまわります。そういうことがこの時代にまだ残っています。

雄谷：

それがやはりすごいです。私も全国各地で、青年海外協力協会として、広島安芸太田、宮城県岩沼、長野駒ヶ根など色々な場所に行きます。まず何を見るかと言いますと、スーパーに行きます。スーパーに行き、お惣菜を見ます。何が分かるかと思いませんか。例えばニシンの昆布締めとかほうれん草の胡麻和えとか色々あります。肉、魚も見ます。何が分かるかと言いますと、若い世帯が多い所はパックも大きいのです。独居の高齢の方が多き所は、パックがすごく小さいのです。スーパーはそういうことをきちんとマーケティングするので、その地域に合わせてできるのです。大きな都市ですと、そのようなことはできません。今、坂口さんが言われたように、スーパーでたくさんの魚を買っても、一人じゃ食べられません。例えば、いつもそこに行き買うおばあちゃんがあります。そしたらご用聞きではないですが、私は売り手と買い手の関係性も理解できているということですか？

坂口：

好みもわかっていて今日は好みの魚があるということや、必要な部分だけその場でさばいたりしてくれそうです。

中尾：

それは新鮮だからできることです。

坂口：

高齢者も多いです。独居の高齢者は輪島でも街中の方も2割ぐらいいます。輪島カブーレの拠点施設のところもそういった地区の一つです。

雄谷：

どんどんなくなっている中、今も残っているというのがいいです。輪島の人には、そういったものを大切にしてくるというところがあるのですか？

坂口：

そうです。残っているのは事実です。

中尾：

朝市も活気があります。

坂口：

今はコロナで大変な部分があります。観光的な要素もありますが、日常生活の中で、お魚、山菜、野菜を毎日買いに行く方も大勢います。

雄谷：

このばあちゃんのために何を持って来るなどあるのですか？

坂口：

あると思います。

中尾：

それはあると思います。スーパーではなく、そういったことがまた見直されてきているような気がします。その方がやっぱり食材の無駄もありません。本当に輪島カブーレは理想的なモデルケースです。

雄谷：

不特定多数の人に売れるものを売るという時代が、どんどん売れる事を目指してきた時代から、今、日本も時代の潮目だと思います。そんな時にコロナになりました。ちょうど考える時期だと感じます。

坂口：

効率よくすることが幸せなのでしょうか。やはり“ごちゃませ”というのはある面効率ということではないと思います。これから目指すべき方向ではないかと感じます。

中尾：

このコロナ禍で、例えば劇場でお客さんが入ってくると、会話はお控えくださいと放送されます。劇場がシーンとしています。それも寂しいですし、東京では夜に歩くと、どこの家も窓が閉まっています。何かあって声を出しても誰も助けてもらえないと思うと、輪島カブーレは、みんな家の中が見えて、何かあっても声がかげられると思います。住むと安心だとつくづく思います。

雄谷：

プライベートな話ですが、九州から東京に出て来られてデビューされたのですか。

中尾：

はい。九州は10歳ぐらいまでしかいませんでした。九州はお魚屋さん、市場がすごく賑わっています。その記憶はあります。輪島は懐かしい思いが蘇ってきます。

雄谷：

東京に出て成功されて、ずっと東京に住まれているのですか。

中尾：

そうです。ここまでくると、ここから先はある程度先が見えています。これから先いつまでも元気で働けるとは思えないですし、働けなくなった時にいかになるべく人のお世話にならないで、自分で何かやれるものがあれば、それが一番幸せだと思います。自分が駄目になってからでは見つけられません。元気なうちに、自分は動けなくなった時にどういう生活を送りたいかを考えておいた方がいいと思います。

雄谷：

坂口さん、ミエさんは明日ももうわかりませんと言って、空中ブランコに乗っています。空中ブランコ乗るような人に明日もわからないと言われても、それは空中ブランコから落ちてってということですか。

中尾：

でも80、90になって空中ブランコはやれません。

雄谷：

いや、可能性あります。ミエさん縛り付けてでもやってもらい、ギネスに出てください。

中尾：

何を言っているのですか。本当に正直言って誰も知らないです。私は輪島には今まで何の縁もありませんでした。普通みんな年を取ったら仲の良い人と一緒に住もうと言うではありませんか。私は輪島で誰も知らないですし、昔住んだことがある等、何の関わりもないのですが、ここだと安心という感じがします。自分でも不思議です。このコロナ禍でしばらく行けませんでした。行かない間に忘れてしまうのではないかと思っていたのですが、早く行きたいと思います。この思いは何なのだろうと自分でも不思議な気持ちです。

坂口：

ありがたいです。輪島の者としては、そういう風に言っていただけると嬉しい限りです。

中尾：

私の知り合いが「金沢って暗いところですよ」と言っていました。そういったイメージがあります。それを払拭させたいです。

坂口：

やはり来ていただく前は、高齢者が増えてきていて、空き地の方も能登半島地震の平成 19 年以降、特にどんどん増えました。閑散とした感じが出てきていました。やはりこれでは寂しいと思っていたのですが、来ていただいた後、あの一角がこう明るく、光が内から外へ漏れているというのです。すごく明るい雰囲気になりました。多くの地区の人達は温泉も無料ですから、若い子達も子供達も集まってきて、お母さん方もすごく集まってきて、賑やかな場所になってきています。

雄谷：

嬉しかったのは、“ごちゃませ”の場所は必ずトラブルが起こります。“ごちゃませ”の場所は、小さい子も若者もお年寄りもみんなこのように仲良く過ごしていると、よく言われます。けどそのようなことはありません。仲の悪い人は必ずいます。ある時、うちで働いている障がいのあるスタッフが子供を注意しました。子供を注意したら、何回か言う事を聞いたのですが、後々言うことを聞かなくなってしまいました。そうすると小学校の高学年の子がふざけて水をかけたのです。水をかけたら、今度は障がいのあるスタッフのお母さんが、それは人権侵害だということで教育委員会に行きました。すると、そういうことが起こらないようにきちんと分けた方がいいのではないかという意見が出てきました。「こういう言い方をしたらあれですが、“ごちゃませ”と言っても、そんな問題起こしたら困ります」となってしまいました。その時に嬉しかったのは、坂口さんや商工会議所の里谷さんは、「そういったものを分けてしまえばなくなるかもしれませんが、問題は解決できていないです。」とってくださいました。私はそこがうれしかったです。そういう時は、必ず運営している側の問題になるのですが、主体がどこにあるかというと、みんなで守って運営していくのは誰なのかというと、やはり輪島の人たちであってほしいと思います。その一言は私達も非常に勇気

をもらいましたし、自分たちのこととしてカブーレを育てようとしてくれているのだと感じました。

坂口：

今の話は、最も起こりやすく、わかりやすいケースだと思います。役所というのはどうしても問題が起こらないようにするのが役所仕事です。それだけでは子供たちの心の問題などはやはり解決しません。現実には起こります。社会へ出ると起こる事なのですが、最初から蓋をしてしまうことは本当にいいのかと言うとやっぱり違うなと思います。問題が起きて、それをどのように分けずに解決していくかをしないとダメです。本当に大きな問題としてとらえないといい人生になりません。

雄谷：

コロナ禍でも案外そういうところがあります。とにかく外に出ないようにすること。それももちろん大切です。マスクをするなど、もちろん一生懸命やらなくてははいけないのですが、あそこの家から出たとかという話が出てきてしまいます。地域の力があると、本当の意味での地域の強さのようなものが養われていく可能性はあります。

坂口：

幸い輪島市ではコロナの発症者はまだいません。第一号になりたくないという話があります。「副市長、最初になってください。そうすると安心します」と言われます。

中尾：

カブーレの素晴らしいところは、自分達だけではなくてご近所の方も全部受け入れるって言うのが他と違います。本当にそれが素晴らしいです。私は色々な人に言うのですが、日本全国にこういう施設を作ってほしいです。私からすれば、これが理想的な老後に住むユートピアです。

坂口：

地方創生の「生涯活躍のまち」づくりのモデルケースですからね。

雄谷：

そのモデルケースというのは聖域みたいなものではなくて、悲喜こもごもというか、楽しいことも嬉しいこともいっぱいあります。そこで人と人ですから、あいつが来るのだったら行きたくないなど、そういうことは必ず起こります。そういったことはなくならないですし、そのようなものです。お魚の話でも、あなたはこの時期だったらこれが良いですと言われます。裏を返すと、構わないで欲しいと思う人にとっては、面倒くさいものですか？

中尾：

例えば今の老人ホーム等は、構いすぎだと思います。歳をとったら何もしなくて良いです。三食美味しいものを作って提供してくれますし、後は何もしなくて、一日中じっとしててくださいって言う所が多いのですが、裏返せば、生きていて、やる事が何もないっていうのは一番苦痛です。だから高齢者でも、あまり構われたくありません。やれることはどんどんやらせてくれた方が良いのです。やはり自分が役に立っているという意識がないと生きがいを感じません。だからあんまり高齢者を大事にしないほうがいいと思います。高齢者になったから言えるのですが、佛子園でも高齢者で働いてる方が多くいます。皆、楽しいと言って働いていました。

雄谷：

最近の例ですが、何日か前に面接をしました。どういう人かと言うと、奥さんを亡くした方です。自分で司法書士をやって開業していて、仕事もうまくいっていました。ところが、奥さんを亡くし、何かがおかしくなってしまうしました。それからお酒をどんどん飲むようになり、ついにアルコールに依存状態になってしまいました。病院に行ったらうつと診断されました。アルコール依存を持って、うちに来ました。とにかくこのままですと破綻してしまうので、グループホームに入って、まずは施設の障がい者の就労支援に入らせていただきました。すると、それからお酒飲まないで済むようになりました。何が嬉しいかと言うと、家に帰ったら障がいの重い知的障害の人がずっと玄関で待っていてくれるそうです。私は、彼が中学生ぐらいの時から一緒にいるのでかれこれ 30 何年の付き合いなのですが、その人は自分でどこかに行くことができないのです。ご飯も作れないのですが、お休みの時はその彼が作るわけです。今度一緒にどこかに行こうと言い出したら、彼もすごく落ち着いてきて、今就労から今度はパートタイマーになって、この間正職員を受けたのです。それで正職員で受けました。なぜアルコール依存から脱出できたかと言うと、彼が待っていてくれてすごいほっとしたと言っていました。一方で、ポツンとなつてがらんどろみたいになった自分がいて、でもこの人は待っていてくれるけどご飯も作れない。じゃあお休みの時は僕が作ってあげたら、「早くご飯作れ」と言うようになりました。こういうやりとりというか、必要とされるのですが、それはそれでやり始めたら「早くしろよ」と言われるらしいです。

中尾：

普通の老人ホームに行くと、軽症の方は今ここに住んでいて、ちょっと体が動かなくなったら次の施設に移って頂いて、最終的には病院が全部併設していますから、最後まで大丈夫ですと言うのです。悪くなるだけのレールなのでしょうか。そこから元気になって働きただすオプションはないのでしょうか。だからみんなそのような実例があると言うのを聞いたら驚くと思います。

雄谷：

福祉とか医療の関係者は、自分が仕事としてやっている以上やらなきゃいけません。すると

自分はサポートしてあげる側、受ける方はサポートされる側になってしまいます。私はプロとしても一つ上に上がらないといけないと思います。確かにサポートしなくてはいけない、いろんなことが多いかもしれません。私の父がまさにそうでした。末期の癌でも執行猶予の彼に会うと急に元気になっていました。その存在自体がすごく機能しています。ミエさんの言うように、あれこれされたくありません。

中尾：

ちょっと乱暴な言い方をしますが、どちらにしても人間終わりは来ます。その時までいろんなことを規制されて生きていくより、いよいよ駄目ってわかったら逆にやりたいことをやらせてくれる方が一番いいと思います。だからみんなにもっと意識を持ってほしいと思うのは、みんな終わりはあるというのを本人はもちろんもっと自覚して、最後の人生をいかに楽しく過ごすかというのを考えて貰いたいと思います。

坂口：

それが幸せな人生だと思います。居場所というか自分のやりがいです。それがあって幸せな人生が作れると思います。

雄谷：

居場所は大切です。私は社会福祉法人の理事長ですし、ずっと福祉施設の中で育ちました。違和感を肌身に感じていて、そのように堅苦しいものではなくて、喧嘩も起こります。例えばいつも行く飲み屋さんでぞんざいに扱われるとします。「自分で持って行ってくれ」みたいな店もあります。でもわざわざ言わなくても、「例のやつね」と言ってくればいいですが何も言わないでそっと出します。「名月」って拠点のカブーレの隣にある割烹旅館の親父がまた名物おやじなのです。輪島塗の塗ってないやつを持ってきます。これを持っていけと言われる。すごくいい匂いがします。その親父はとにかくいい年です。ところが行ったら「これおいしいから」と言ってくれます。自分のところにもお客さん泊まるはずなのですが、必ずカブーレに連れてきてくれるのです。「理事長来ていないけれど忘れてるのか」と。ちょっと嫌味のひとつでも言って帰っていきます。例えばミエさんが輪島に移住するとなると、東京と二重生活になるかもしれませんが、そういうのはすごい財産だと思います。一から作るって言うのではなくて、いつのまにかもうここに来たらそういう人たちの関係性があるということです。こちらから東京に行くと、自分で開拓しなくてははいけません。

中尾：

高齢者になると、徒歩圏内で行動したいです。車もいりません。だからその中で退屈せずに、そういうコミュニケーションを取れる環境ができていると言うのが、一長一短にできるものではありません。そこが雄谷さんは長いことご苦労なさったのかもしれませんが、ここまで作り上げてくれているので、もうあとは行けば良いだけという感じです。ありがとうございます。

雄谷：

主体性がないとダメです。さっき話した通りです。ミエさんのずるいところは、自分の人生に主体性を本当は持っているのに、「ここをお願いよ」と言うのがずるいです。

中尾：

それはいい意味で頼っているという事です。元気なうちにそういうコミュニケーションをとる必要があります。あまり感じなくなってしまうからでは、お互いにしんどいです。元気な内からですと、分からなくなっても「ついに来たか」と思います。

坂口：

輪島のまちはコンパクトで、結構仲良くなると、みなさん魚釣りもできますし、畑も作ったりできます。お世話を焼いてくれる人もいて、過ごしやすいと思います。そこが魅力だと思います。

雄谷：

輪島は本当に楽しみです。お金をかけなくても、例えば空き家を使って、ガレージハウスを作ります。インバウンドの人など、ここに来た人達は「やっぱりここはすごい」と言います。温泉に入って、いろんな人と関わる事ができます。半島というところもあって、いろんな人たちが考えていることを、あつたらいいのではないかと街の人たちは多分みんな色々持っています。でも結構これ日本全国だと思うのですが、縦割りだったりします。福祉は福祉。ここはいよいよ坂口さんにしゃべってもらいしょう。

坂口：

どうしても役所は効率性を求めて縦割りになってしまいます。本当に横の連携が足りません。福祉は福祉でも健康の方と老人の方とまた違っていたりします。“ごちゃまぜ”ってある意味、“ごちゃまぜ”だからこそいろんなことが起こるのですが、それがまた新しいやり方、生き方につながっていきます。そういう部分では雄谷さんのスピード感とかいろんなことが、プレッシャーになりますが、とてもありがたいという風に思っています。

雄谷：

僕らもいろいろなものを進めようとする、ぶつかるときがあります。戦後の日本はそういった縦割りで進めてきて良かった部分もあると思います。住んでいる人をベースにここが不便だということを、居場所とか拠点とかがあると意見を集めやすいです。皆さん、この地域に問題がないですかと言って、その特別な場所を作って、さあ言ってごらんと言って怖くて言えません。しかし、温泉に入って楽になって、その中で生まれてくる言葉は案外リラックスして喋っています。そこにヒントがあるような気がするのです。そういう意味ではとりあえず場所はできてきたので、そこから次どうやっていろんな皆さんが思っていることを積んでいくか、ということでしょうか。

坂口：

やっぱりそういった中でカブーレはなくちゃならないなという風に思っています。

中尾：

役所は縦割りにならないと仕事がしにくい部分があると思います。それはやはり役所でできないことは民間の人にやってもらうことが大切です。役所がいちいち全部に目を配らなくても、やってくれることはいっぱいあります。それを理解した上で雄谷さんが“ごちゃまぜ”のところでのいろんな意見をして、行政にも協力してもらい、それがうまく連携が取れるのが一番良いです。

坂口：

一番いいですね。理想です。

雄谷：

問題が起こったらミエさんがザ・デイサービスショーみたいに舞台にしてくれたら良いと思います。輪島ではこういう問題が起こっていて、坂口という悪代官がいますという舞台です。まさに今ミエさんが喋ってくれたことがその中に入っているのです。僕はすごく面白かったです。自分たちの生きがいは、皆で作っていくものだよというのがすごく良かったです。

中尾：

こうやって今私達3人は、コミュニケーションがあるからですけど、坂口さんみたいに話の分かる人が居てくれれば話が進めやすいです。だから坂口さんずっといてください。いろんな業種の方が協力し合う必要があります。

坂口：

輪島カブーレは、本当にスピード感がありますが、これからやろうと思うこと、今後展開する構想はあるのですか？

雄谷：

私達は黒子です。リゾートは非日常から日常って話をしましたが、今はいろんなカッコいい、美味しいとかすごいとかという時代から、じっくり落ち着いて暮らしてみるという流れが来ています。コロナになったからと言っても、それを悲観していても仕方ありません。私は、コロナだからいつもよりしっかり食べて、しっかり寝て遊んでというようなことをやったら、コロナになる前よりも元気になると思っています。それを逆転させて行くと言うかそういった事を丁寧にやるには時間がかかると思います。それを進めていく国土強靱化と言いますか、道路とか橋とか堤防とか、僕らも東日本の応援にずっと入ってきて今ようやく創生まで来ました。

坂口：

心というかソフトが大切です。行政の理想のまちづくりというのは、究極はやはり、誰もが、心豊かに安心して暮らせる、そんなまちづくりが究極の目標だと思います。実現するには輪島は能登の先端なのですが、実現できるまちではないかと思っています。エンターテインメントを楽しむ時は東京に、飛行機で1時間で行けますし、日常では色濃く残っている古き良き生活習慣も多く残っています。若い人たちにとっても、いろんなスポーツができる環境も揃っています。もっともっと多くの方々に来ていただきながら、これからも佛子園の皆さんと一緒に、輪島で頑張っていきたいと思います。私たちはどうしても役所の中で頭が固いところがありますから、皆さんの経験で、世界を股にかけたJOC Aの皆さんの経験で、そうしたエッセンス、エネルギー、刺激を与えていただければ、私達も一緒になってまちづくりをしていきたいと思っています。

中尾：

つくづく思うのですが、そこに行って心豊かにゆっくり暮らしたいとかではなくて、そこで自分は何ができるかなという思いでみんな来ていただきたいと思います。最後まで自分はそこで何の役に立てて、どういう暮らしができるかと考えて、人のお世話になりたいと思うのではなく、最後まで現役でいて欲しいと思いますね。

雄谷：

コロナの下でこうやって機会をいただいて話ができ、平常心を持ちながら、新しい未来を考えていくという事が引き続きできたらいいと思います。どうもありがとうございました。

司会：

どうもありがとうございました。皆さん出会いの懐かしいお話から、そして輪島カブーレの魅力そして人生についてなどまさに“ごちゃまぜ”のトークを聞かせていただきました。この時間進行役を務めてくださいました雄谷理事長、そして中尾ミエさん、坂口副市長どうもありがとうございました。

4. 閉会

司会：

それでは最後に輪島の坂口副市長より閉会のご挨拶です。

坂口：

今日は3人でいろんな話ができ今後の輪島市のまちづくり、輪島カブーレの未来が楽しみになってきました。能登半島の先端にある輪島市ですが、街中にこの輪島カブーレがですね、全国のモデルとなるような素晴らしい活動をしております。今来ますと11月の7日からは冬の味覚の王様のズワイガニ解禁となりますし、白米千枚田ではあぜのきらめきもやっています。美味しいものもたくさんあります。気に入ったらぜひとも移住していただきたいと思

います。よろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。

司会：

坂口副市長ありがとうございました。

以上をもちましてシンポジウムライブ「「ごちゃまぜ」のまちづくり～高齢者も障がいのあ
る方も誰もが居場所と役割を持つコミュニティ～」を終了いたします。

本日はご視聴いただきましてありがとうございました。

(以上)